

<前回・ブルトマン2・非神話論化と実存論的解釈>

(1) ブルトマンと非神話化

1. 聖書学者ブルトマン → バルトの弁証法神学への関与以降も、自由主義神学との関わりを保持。

↓

聖書学でないとすれば、信仰はどこで可能になるのか？

2. 近代的世界観と聖書的世界観（黙示文学、グノーシス主義＝神話論）との対立
近代人は聖書的な宗教を信じうるか？
→ 信仰の事柄（宣教、内容）と世界観（形式）との関連はいかなるものか、両者は分離可能か。
3. 聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論的解釈
4. キルケゴールの真理論：客観的真理と主体的真理
信仰と世界観との区別・分離 → 信仰の主体性の純化。個人的な事柄か？
5. 聖書を非神話論化することによって、実存論的解釈によって、主体的真理を取り出す。
世界観という形式ではない仕方での信仰の表現。
ハイデッガー哲学（『存在と時間』）の枠組み（本来性・非本来性）
6. 創造物語：古代人の天文学や生物学の理論ではなく、神の語りかけに聴従し応答する人間。
人間存在の善性のメッセージ、信仰とは神の語りかけに対する「今ここ」の決断。
7. 説教というモデル（プロテスタント・ルター派的？）
→ ブルトマン学派における「言葉の出来事」：神の語りかけと決断
8. ブルトマンの問題点
 - ・信仰と世界観とは分離可能か、分離すべきか。形式と内容の分離？
決断の抽象化
 - ・神話あるいは構想力の理解が一面的ではないか。
神話は過去の遺物か、構想力の解放性についてブルトマンは理解しているのか。
 - ・近代的世界観あるいは個人主義的信仰を自明の仕方前提にしていないか。
科学技術や個人主義への批判はブルトマンから可能か？

(2) ブルトマンの信仰論

- ①言葉の出来事性：語りかけ→言葉における継続・出会い→応答・決断
- ②時間性—終末論的（そのつどの今）→決断・聴従
- ③理解：神理解—自己理解（神学—人間学）の循環
- ④実存的な自己理解（自己の存在可能性）と歴史的知識・世界観との相違
- ⑤客観性→主観性・主体性

→自由の処理できない・神の主権

1) 信仰と世界観との区別・相違

主体的決断と客体化・対象化（偶像・支配の欲望）←キルケゴール的モチーフ

・聴く（聴従、Gehorsam）：

神の語りかけ→説教→決断：現在の出来事（言葉の出来事）

現在の終末

神の本質的な非対象性

・見る：世界像・世界観

2) 世界像・世界観

古代（黙示的、グノーシス主義的）／現代（科学的）

信仰とは世界像からの自由・解放である。

3) 聖書における神話論と非神話論化

聖書においては宣教(Kerygma)のメッセージを表現するために、先行する宗教的伝統(古い神話)から様々な表象が受け継がれ、神話的表現が行われる。しかし、パウロとヨハネにおいて、すでに神の客体化・対象化の克服が行われている。

パウロ：肉によるキリスト

ヨハネ：「しるし」批判

4) 現代人の世界観としての科学的世界観

聖書的世界観(古代の世界観)の強制は、知性の犠牲である。

ブルトマンの近代性

5) 神話論からの脱却としての非神話論化

神話が表現しようと本来意図している信仰(実存的自己理解)を取り出すこと。その方法としての、実存的解釈。

ここで、ブルトマンはハイデッガーを参照する。

↓

神話という語り方の承認と、その客体化(神話論化)の拒否

非神話化ではなく、非神話論化(Entmythologisierung)。

非神話化は誤訳か? あるいは、ブルトマンの曖昧さか?

7. テイリッヒ 1

(1) テイリッヒの思想史的位

- ・近代世界のキリスト教 → 弁証神学：神学・信仰と哲学・文化、教会と社会
- ・自由主義神学と弁証神学：総合あるいは第三の道

1. 『キリスト教思想史講義』(A History of Christian Thought)の構想から

(1) 思想史という研究領域とその目的

the tremendously large subject of Protestant theology in the nineteenth and twentieth centuries.

The primary purpose of this course is to understand our own problems by seeing their background in the past. ... I want to show you how we have arrived at the present situation. In view of this purpose it will be possible to draw from a great amount of material.

I hope you will discover that the past can be interesting even in itself, (297)

there always exists this twofold purpose of a course in history, and especially of a course in the history of thought. The main purpose is to understand ourselves; (297)

(2) 思想史の諸動向・諸要素、思想のテロス

There is a point of view which I want to use, the continuous series of attempts to unite the diverging elements of the modern mind. The most important of these attempts will seek to unite the orthodox and the humanist traditions. If the word "orthodox" seems too narrow for you then we can speak of the "classical" tradition instead. All modern theology is an attempt to unite these two trends in the recent history of Christian thought.

no positive relation between them at all

a complete unity between them, either in the one direction or in the other.

But between these two opposite answers there can be many others, not as onesided as these two, which try to find a vital relationship, filled with many problems, tensions, and possible solutions. (300)

(3) 近代という知的なプロジェクト

I will develop the different elements in this divergent situation which had to be united. After

having shown these elements, namely, Orthodoxy, Pietism, the Enlightenment and Romanticism, etc., I will discuss the greatest the most embracing and effective, but in the last analysis unsuccessful attempts to bring about a union of all of them. I call these the great synthesis.

the theology of Schleiermacher and the philosophy of Hegel --- these two great representatives of the synthesis in the early nineteenth century --- ... They are very genuine and have had a tremendous impact on the whole history of thought to the present day. (300-301)

These two thinkers, Schleiermacher and Hegel, are the points toward which all elements go and from which they then diverge, last bringing about the demand for new syntheses. We will see how these new syntheses have been attempted again and again, and finally what in my opinion has to be done today.

the Ritchlian school, the Bultmann school

Thus we really have a drama before us, a drama in which many tragedies are involved. All the disruptions of inner, personal, spiritual life of countless people are involved in the conflicts of this drama... (301)

<ティリッヒ (1886-1965) >

神学と哲学の境界 (神学者・哲学者)、宗教社会主義、文化の神学、宗教史の神学
ドイツからアメリカへ → 現代キリスト教思想は理論と実践の両面で変革を必要としている。

・ドイツ生まれのプロテスタント神学者、宗教哲学者。ベルリン、テュービンゲン、フランクフルトなどの諸大学で教え、宗教社会主義の理論家として活躍。33年にヒトラー政権によって教授職から追放され、アメリカ亡命後はユニオン神学校、ハーヴァード、シカゴの諸大学で活躍。アメリカの神学と宗教哲学に大きな影響を与えた。ティリッヒ思想の特徴は、自伝「境界において」の表題にあるように、宗教と文化、神学と哲学、観念論とマルクス主義など、緊張関係にある二つの領域の境界で思索を展開している点に認められる。アメリカ時代の代表作『組織神学』(全三巻 新教出版社)では、人間存在の中に構造的に組み込まれた諸問題が宗教的問いとして哲学的に取り出され(哲学的神学)、その問いに対してキリスト教のメッセージがいかに答えるかが体系的に示された。この組織神学の方法論が「相関の方法」である。ティリッヒの影響は神学や宗教哲学を超えて宗教学全般に及んでおり、究極的関心という信仰概念や、信仰の具体的表現形態を扱うシンボル論はとくに重要である。晩年は、日本の宗教者との交流などを通じて宗教史の神学を構想するに至るが、未完に終わった。(『岩波キリスト教辞典』)

・西谷啓治「宗教哲学——研究入門」(1949) (『西谷啓治著作集 第六巻』創文社)

「ティリッヒ」: 179-180 頁。

- ・1925 年の宗教哲学、1926 年の「カイロスとロゴス」、1930 年の『宗教的現実化』
- ・無制約的なもの、Grund und Abgrund、神律、逆説の宗教、metalogisch、後期シェリング、デモーニッシュなもの、カイロス

2. 思想の発展史: 初期 (-第一次世界大戦) / 前期 (1919-1933): 意味の形而上学 / 中期 (1933-第二次世界大戦) / 後期 (1946-1960): 存在論 / 晩年 (1960-1963)
3. 一貫性と変化 (思想の諸レベルにおける議論): 弁証神学・宗教哲学、象徴論
前期: 文化の神学、宗教社会主義論
後期: 組織神学、宗教心理学・精神分析

(2) 前期ティリッヒ：認識論から存在論へ

4. 19世紀から20世紀の哲学の展開＋弁証法神学

5. Kairos und Logos: Eine Untersuchung zur Metaphysik der Erkenntnis (1926), in: MW.1

0)問題：歴史主義（19世紀の学的神学の帰結）を克服する真理の動的理解

1)西洋思想史の二つの流れ：

主流（方法論的流れ、合理的学の理念・形式主義）と傍流（神秘主義、生の哲学）
直観的記述的、反省的説明的

2)真理は超時間的・超歴史的。抽象的な真理概念 → カイロスへのアスケーゼ
永遠の真理

3)認識の歴史性・決断→存在の歴史性・決断

（实在論：認識の合理性は対象の側から規定される。）

歴史主義的な相対主義への回答は、真理自体の歴史性において可能になる。

「ロゴスは時間のなかにはいつてきて、その内的無限性を啓示するのである。」

ロゴスはカイロスのである。

Der Logos wird Fleisch; er geht ein in die Zeit und offenbart seine innere Unendlichkeit.

(290)

So dient der Kairos nicht der Verhüllung, sondern der Offenbarung des Logos. (296)

4) ヨハネ福音書のロゴス論（受肉）→ドイツ観念論・後期シェリング

→後期ハイデッガーの真理論・存在論

Seinsgeschichte、Geschick

ハイデッガーは聖書的か？

5) 絶対者自体が動的歴史的である。

cf. ・形而上学的な神＝神の不可受苦性

・弱い神、あるいはプロセス神学

弱い神の方が、より高い。

↓

後期の「相関の方法」という語り方へ

カイロス→状況、ロゴス→メッセージ。

6. 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」（1946）

（上田閑照編『自覚について 他四篇』岩波文庫）

「内在的超越のキリスト」「私はベルジャエフの「歴史の意味」に対し大体の傾向において同意を表するものであるが、彼の哲学はベーメ的な神秘主義を出ない。新しい時代は、何よりも科学的でなければならない。ティリッヒの『カイロスとロゴス』も。私の認識論に通じるものがあるが、その論理が明でない。これらの新しい傾向は、今や何処までも論理的に基礎付けられなければならない。」(396-397)

「国家と宗教」「浄土真宗的」

(3) ティリッヒの神話論

7. ティリッヒによる神話論の概要

die *negativen Theorien* des M. bestreiten dem M. einen selbstständigen Gehalt. (229)

die *positiven Theorien* des M. sprechen den mythischen Schöpfungen eine selbständige sachliche Bedeutung zu. (230)

消極的な理論：還元主義的な神話論、神話を社会的心理的な作用・領域へ還元する。

寓意的な諸理論(die *allegorische*)、心理学的な諸理論

積極的な理論：神話自体の論理構造から神話を論じる。

シェリング（象徴的、現実主義的な理論）*die bedeutungsvollste metaphysische Theorie*

カッシーラー（認識論的理論）*die erkenntnistheoretische Theorie*

8. 批判哲学→文化の哲学→刷新された実在論に基づく宗教思想：宗教言語、神話

Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress, 1993.

波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）：波多野宗教哲学の原型・原構想

「カント」「批判主義」「カントを理解することは彼を超越すること」「しかもカントを超越しよ」（200）「うと欲する者は、先ず最初に彼を理解しなければならないのである。批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、その理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粹理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるといえることができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」（201）

↓

カッシーラーの「象徴形式の哲学」

9. カッシーラーの象徴形式の哲学における神話論

Er schreibt dem M. eine eigene innere Sachhaftigkeit zu, die sich in dem gesetzmäßigen, sinnvollen Aufbau der mythischen Welt ausprägt. Der M. ist wie Wissenschaft, Kunst, Sprache ein notwendiges Element des Geisteslebens. Seine Realität beruht ebensowenig wie die Realität jener Sinngebiete auf den Schaffen einer in sich sinnvollen geistigen Welt. (230)

10. シェリングの実在論

Er (Schelling) sieht in ihm den Ausdruck eines wirklichen theogonischen Prozesses, d. h. eines Prozesses, in dem sich die in Gott geeinten Prinzipien widerspruchsvoll im menschlichen Bewußtsein durchsetzen. Von hier aus gibt er eine umfassende realistische Mythendeutung. (230)

↓

カッシーラー+シェリング

批判哲学+実在論 → 批判的実在論、超越的実在論

die symbolisch-realistische Theorie

11. Ernst Cassirer, *Philosophie der symbolischen Formen. Zweiter Teil. Das mythische Denken*, 1925, (Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977)

（４）キリスト教信仰にとって神話とは何か

12. 「非神話的な意識というようなものが存在しうるか」

「歴史的現実と、神話を作り出すところの人間精神の構造」

ob es ein schlechthin *unmythisches* Bewußtsein geben kann, (229)

durch gleichzeitiges Schauen auf die geschichtliche Wirklichkeit und auf die Struktur des menschlichen Geistes, der den M. schafft. (229)

13. 「破られた神話」*der gebrochene M.*

「神的なものを空間と時間のなかへもちきたらし、人間の形姿にかたどって客体化する行為」

「神話の克服」、預言者的、神秘主義的、哲学的

神話は克服されるが、神話の実質は残されている。

「神的なものの無制約的超越についての意識によって破られた神話」、「神話が破られている場合には、神話的なものはあらゆる宗教の一要素」

Die im M. enthaltene Vergegenständlichung des Göttlichen in Raum, Zeit und Menschenbildlichkeit wird von der prophetischen Frömmigkeit bekämpft, von der mystischen überboten, von der philosophischen als unwürdig und widersinnig dargetan.

Das Göttliche ist erfaßt als das Unbedingte, Seins-Jenseitige; es geht nicht ein in Raum und Zeit. Aber es ist nur anschaulich in Symbolen, die raum-zeitlichen Charakter haben. Der M. ist überwunden, aber die mythische Substanz ist geblieben.

Vom Standpunkt des gebrochenen M. aus ist das Mythische ein Element aller Religion, ist M. *religiöse Kategorie*. (231)

↓

神話という表現形態にそれにふさわしい位置を与えること。宗教的象徴自体（その対象の形態）と宗教的象徴が指示する実在との区別に基づく、宗教的象徴体系としての神話の存在意義の正当な評価。

素朴実在論などによって実体化された神話表象の否定、しかし、無制約的なものは形態化（神話）を必要とする。図式、象徴。

<参考文献>

0. *Tillich · Main Works · Hauptwerke. 1 - 6*, de Gruyter.
Paul Tillich. Gesammelte Werke, Bd.I-XIV, Evangelisches Verlagswerk, 1959-1975.
Ergänzungs- und Nachlaßbände zu den Gesammelten Werken, Bd.I- XVI, de Gruyter, 1971-
1. テイリッヒ『組織神学』第1、2、3巻、新教出版社。
Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.1, 2, 3* (1951, 1957, 1963),
The University of Chicago Press.
2. 『テイリッヒ著作集』全10巻+別巻3巻、白水社。
3. ヴィルヘルム・パウク&マリオン・パウク『パウル・テイリッヒ 1生涯』
ヨルダン社。
4. 芦名定道『テイリッヒと現代宗教論』北樹出版。
『テイリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
「テイリッヒ——21世紀へのメッセージ」、『福音と世界』2000年4月号、
新教出版社、18-23頁。
芦名定道「改訂版 パウル・テイリッヒと象徴の問題」
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub3x.pdf>
5. 土居真俊『テイリッヒ』日本基督教団出版局、1960年。
6. Deutsche Paul-Tillich-Gesellschaft : <http://www.theo.uni-trier.de/tillich/tillich.html>
テイリッヒ研究会（休会） : <https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/tillich>
テイリッヒ研究文献（芦名研究室） : <http://tillich.web.fc2.com/sub8b.htm>
テイリッヒ（LogosOffice） : <http://logosoffice.blog90.fc2.com/blog-category-17.html>
7. Paul Tillich, *Mythus und Mythologie*, in: MW. pp.229-236.
8. 鏑木政彦「テイリッヒとカッシーラー——宗教の臨界をめぐって」、『日本の神学』
（日本基督教学会）49、2010年、114-132頁。
9. クルト・ヒュプナー『神話の真理』法政大学出版会。
10. 松村一男『神話思考 I 自然と人間』言叢社。